

全国学力・学習状況調査におけるサンプル分析の活用

—小学校国語科についての取組—

専門研修課

【要旨】 「平成 28 年度全国学力・学習状況調査」のサンプル分析から、和歌山県内の小・中学校に在籍する児童生徒の学習状況を早期に把握し、県全体の傾向を示す概要や指導のポイントについて、県内全域に情報発信を行った。また、明らかになった課題を解決するため、研修や支援を実施することによって、教員の指導力の向上を図ってきた。さらに、国立教育政策研究所の公表した結果を基に、学力層に着目した指導方法等に関する分析等を用い、小学校国語科を中心とした授業改善等の取組を行った。これらを通して、授業改善に係る検証改善サイクルのモデルを提案する。

【キーワード】 全国学力・学習状況調査, サンプル分析, 授業改善, 小学校国語科, 検証改善サイクル

1 サンプル分析の概要

『平成 28 年度全国学力・学習状況調査報告書』には、全国学力・学習状況調査（以下、全国学調と略記）の目的が次のように示されている。

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する（※1）。

つまり、全国学調は、県や市町村の教育委員会にとっては、「教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るための調査であり、その取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立するためのもの」である。また、各小・中学校にとっては、「学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査であり、教育委員会と同様に、その取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立するためのもの」である。

和歌山県教育センター学びの丘（以下、当センターと略記）は、これまでも全国学調の成果と課題を基に、本県の教育施策の検証改善のため、全国学調活用ツール（注1）の配信や小学校授業改善、中学校国語科教育実践・数学科教育実践（注2）、全国学調活用等の研修の開催などを通し、本県の課題改善に取り組んできた。

今年度は、このような取組に加え、県内の小・中

学校数校から答案をサンプルとして提供してもらい、調査のサンプル分析（以下、サンプル分析と略記）を行った。サンプル分析の意義は以下の通りである。

- ①学力課題の早期改善を図る。
- ②各学校が行った自校採点に対する指標を示す。
- ③誤答例から段階的な課題を把握し、授業改善に資する。

これまでは、自校採点をしても、比較する対象がないため、自校の成果や課題について、十分に分析できないまま、8月の公表まで待たねばならなかった。しかし、このようなサンプル分析を行い、その結果を早期に配付することにより、県内の小・中学校においては、次のようなことが可能となる。

- ・県全体の概要を指標として、成果や課題の傾向を早期に知ることができる。
- ・自校採点と比較することで、自校の課題を早期につかむことができる。
- ・誤答例に基づいた授業改善のポイントを知り、早期に授業改善に取りかかることができる。

本稿は、今年度、初めて行ったサンプル分析によって、全国学調実施後、各学校が早期に検証改善サイクルを確立するためにはどのような取組をすればよいのかについて考察する。

（1）サンプル分析の方法

サンプル分析については、当センターの全所員で採点・分析を行った。採点は、全国学調終了直後に国立教育政策研究所（以下、国政研と略記）から発表された解答類型を基に行った。採点結果

は、表計算ソフトで作成した入力表に、類型に分けて入力し、サンプル全体の平均正答率や無解答率、正答人数の割合等を分析し、課題を明らかにした。最後に、国政研から発表された解答類型を基に、具体的な指導方法について協議を行い、サンプル分析に基づく授業改善のポイントを作成した。

(2) サンプル分析を基にした県全域に対する取組

ア 研修の実施

サンプル分析の結果を基に、次のとおり研修講座及び訪問研修を実施した(表1)。

表1 研修実施の日程

学校を活性化する校内研修講座 全国学調の活用		
5月26日(木)	13:00~16:00	紀中の部
5月27日(金)	13:00~16:00	紀南の部
5月30日(月)	13:00~16:00	紀北の部
訪問研修		
6月3日(金)	13:30~16:30	和歌山市
6月10日(金)	13:30~16:30	東牟婁郡

この研修は、全国学調の結果を基に本県における現状と課題を把握し、課題解決のための取組を進める中核教員の力量向上を目指し、校内研修の運営力の向上を図ることをねらいとして実施した。小・中学校及び特別支援学校に勤務する教員のうち申込みのあった受講者を対象とし、小・中学校合同で半日開催とした。研修内容は、本県の課題や分析ツールの活用方法についての説明を中心とし、各校において伝達及び分析を行えるようにした。

イ 動画による研修パッケージの作成

前述の研修の受講者による伝達研修だけでは、県内各学校への周知は十分ではない。そこで、研修の内容を動画に収録し、当センターのウェブページ内にある「動画研修パッケージ」に掲載した。この研修パッケージは、各学校に付与しているIDとPASSを入力すれば、パソコン、タ

ブレット、スマートフォンで視聴できる。各教科10分程度の動画と、校内研修の進め方をセットにした研修パッケージを作成し、学校の現職教育等で活用できるようにした。

次項からは、サンプル分析に関わる今年度の訪問研修を整理することによって、サンプル分析の活用と学校における検証改善サイクルの確立について考察する。なぜなら、サンプル分析を活用した訪問研修を振り返ることによって、学校における検証改善サイクルのモデルを示すことができるのではないかと考えたからである。なお、ここからは、全国学調で正答率が全国平均を下回る設問が多く、学校からの訪問研修の依頼の多い小学校国語科の取組に絞って整理していく。

2 小学校国語科サンプル分析の結果

まず、小学校国語科のサンプル分析における採点時の正答基準やサンプル校全体の平均正答率をまとめた表2をもとに、顕著な課題がみられた問題について以下に示す。

【国語A問題】

『ローマ字の読み書き』に関すること(問題8-1~8-3)の正答率が極めて低い。これらの問題については、内閣訓示第1号「ローマ字のつづり方(昭和29年12月9日)を採点基準とした。

誤答例として、多くみられたのは、次の3パターンである。①「りんご」の「ん」を「nn」、「あさって」の「っ」を「xtu」「ltu」のようにローマ字入力の方法で解答している。②「あさって」を「assate」のように促音の際、重ねる子音を「t」ではなく「s」と解答している。③「hyaku」の「h」の後に「a」と母音を入れ「はやく」と解答している。

【国語B問題】

A問題と比べて正答率が低い問題が多く、それらはすべて「書くこと」に関する問題であった。

1三は、『話し手の意図を捉え、話の展開に沿って質問できるかどうか』をみる問題である。相手の意図を捉えながら話を聞いた上で、話の展開に沿って質問する場面が設定されており、インタ

表2 平成28年度全国学調 サンプル分析における設問別正答率(小学校国語科)(%)

国語	全体平均	設問別正答率														
		1-1	1-2	1-3	1二1	1二2	1二3	2	3	4	5	6	7アイ	8-1	8-2	8-3
国語A	70.5	77.7	98.0	80.5	87.1	74.7	62.4	79.3	66.7	76.1	93.6	68.9	77.3	34.5	31.7	48.4
国語B	全体平均	設問別正答率											n = 502 (人)			
		1一	1二	1三	2一	2二(1)	2二(2)	2三	3一	3二	3三					
国語B	44.5	48.3	48.7	20.6	39.1	13.0	36.9	60.7	78.0	77.4	22.8					

ビューメモに書かれた内容と店長の発言とを関係付けながら、山下さんがどのような質問をしたのかを考えて書くことが求められている。問題の条件である「発言を受ける」とは、問題文中の質問をモデルに「◇店長」の言葉を引用していることとし、採点時の正答基準とした。60.1%の児童が、条件である『「◇店長」の発言を受けて書く』ことができていなかった。また、そのうちの37.7%の児童は、メモに書かれてある内容を使って質問できていなかった。これらのことから、**問題文の意味を読み取ることやメモから必要な情報を取り出すことに課題がある**といえる。

2二(1)は、『目的や意図に応じて、グラフや表を基に、自分の考えを書くことができるかどうか』をみる問題である。グラフや表を基にして、今回の活動では改善できなかった課題を捉えて書く場面と、課題に対する解決方法を考えて書く場面を設定している。(1)では、活動前(5月)の状況と、活動後(11月)の結果を比較して、「今回の活動では改善できず、これから解決していきたい課題」という本文の内容を受け、課題が何かを捉えて書くことが求められる。本問の正答基準は、問題文中の活動では改善できないという内容が書かれていることとした。本問からは、「書くこと」に加え、**与えられた資料等を基に、自分の考えをまとめていくことに課題が**みられた。

3三は、『目的に応じて文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読むことができるかどうか』をみる問題である。複数の資料を関係付けて読む場面が設定されており、【資料2】の文章に書かれている内容を、【資料1】の図に当てはめながら捉えることが求められている。ここでは、問題文中に提示されている「苦労」に触れず「喜び」にのみ触れて記述していること及び【資料2】と【特に心に残ったこと】の両方について記述していることを正答基準とした。25.2%の児童が、【資料2】と【特に心に残ったこと】のどちらか一方しか記述できておらず、無解答率は9.6%と極めて高かった。これらのことから、**示された資料にある情報を十分理解し活用することや、書くために必要な情報を取り出すことに課題がある**と言える。

B問題で課題となった3問に共通するのは、**書くことに課題がある**ということである。しかしながら、書くための前提となる与えられた資料を理解することや、必要な情報を取り出すことができず、正答を書くための十分な読み取りができていない児童が多くいることも確かである。

このことは、本県の課題として、これまでも

みられたことである。

3 サンプル分析を基にした訪問研修の実施

サンプル分析後、サンプル分析の協力校をはじめとした数校から、分析結果を軸とした訪問研修の依頼があった。そこで、サンプルとして集めた児童の解答用紙から四分位数による分析(注3)や誤答分析を行い、そこから見えてくる児童や学校の課題を分析することにした。

表3は、児童が実際にどのような解答をしたのかを一覧表にまとめた「誤答分析シート」の一部である。列見出しに設問、行見出しに児童の出席番号をとった表に、各児童の誤答内容のみを拾い出し、入力していく。これにより見えてきた児童個人や各問の状況から、正答率だけでは分からない記述問題等における児童の解答状況について、四分位数による分析と関連させて捉えることができる。

例えば、あるクラスには、四分位数の各層に児童が何人ずついて、各層に特徴のある誤答の類型はどのようなになっているかについて、分析することができる。また各層の児童が、こういった言葉を選んで記述しているか、何に注目しているか、どこでつまづいているかを推察することもできる。これらにより、学年や学級の状況を把握することができる。

表3 誤答分析シートの一部

		1			2			3			4			5			6			7			8		
		1			2			3			4			5			6			7			8		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
	かい	ちよ	はひ	種	類	種	2	1	5	3	4	3	3	5	2	ringo	asatte	ひく							
	せい	きん																							
1			そ						2	4				2	5										
2							想	み	0	1	3	2	1	4											
3			の										1												
4				重					4		4	4				ringo	ASATE								
5										5	3			2	4										
6																			1						ひく

学力層ごとの正答率の分布や、誤答分析シートによる分析を行う中で、各校における特徴的な課題や、共通する分析結果が見えてきた。ここで得られたことを基にし、訪問研修の依頼のあった各校において研修を行った。次に、数校で共通してみられた分析結果とそれに伴う研修について具体的に示す。a校・b校の分析結果及び研修は、複数の学校で行った内容を組み合わせで構成したものである。

【a校】

a校では、表4のとおり、A問題の漢字の読み書きについて、下位層に大きな課題がみられた。

表4 a校の正答率及び学力層別正答率 (%)

	かいせい	種	相談
正答率	57.4	61.1	48.1
サンプル分析との差	▲20.3	▲13.6	▲14.3
A層	100.0	100.0	100.0
B層	84.6	76.9	69.2
C層	37.5	68.8	31.3
D層	31.3	18.8	18.8

漢字の指導について、低学年では、筆順から丁寧に時間をかけて指導を行っている。しかし、学年が上がるにつれ、指導内容が複雑化するとともに教材文が長文となり、「読むこと」や「書くこと」を重視した指導を行うことになる。そのため漢字の指導にまで丁寧に時間をかけられておらず、専ら、毎日の宿題として漢字ノート等に反復練習をしたり、小テストをしたりすることで習得を図っているのではないかと考えられる。

こうしたことから、漢字の学習の仕方を児童に指導することが肝要であり、中でも、筆順指導が大切であると考えられる。正しい筆順で書くことで、とめ、はね、はらい等、整った字形で書くことができ、正しく理解することができる。また、筆順の原則(①上から下へ ②左から右へ ③横から縦へ 等)を押さえることで、字形を意識しながら理解を促すことも期待できる。その際、「空書き」や「指でのなぞり書き」等をするのも有効である。また、漢字は一文字だけ理解しても、使えるものにはなりにくい。そこで、意味や用法を考えさせたり、熟語を考えさせたり、日常の学習指導の中で、反復的螺旋的な指導が望まれる。また、漢字を読むことはできても書けない場合が多くみられる。この能力の差異に留意しながら、慎重に指導を進めていく必要がある。

B問題においては、2(一)に着目した。これは、資料に示されているグラフを基に、分かったことについての的確に書けている文章を選択する問題である。「早ね早起き朝ごはん」運動の活動の成果を示すために、〈図〉から読み取ったことを書く場面が設定されており、凡例を基にしながら、全国平均、活動前(5月)の状況、活動後(11月)の結果をそれぞれ関係付けながら考察し、分かったことを適切な言葉で説明することが求められている。表5は、この正答率を四分位別に示したものである。サンプル分析の平均を見ると、各層で正答率がなだらかに推移している。a

校では、A・B層においては、サンプル分析の平均とほぼ同じである。しかし、C・D層は極めて低くなっている。このことから、a校は、A・B層とC・D層の学力差が大きいことが分かる。

図表やグラフなどを読み取っていく学習を進めていく際、おそらく、A・B層の児童は、スムーズに理解し、授業が展開していくことが予測される。しかし、そうなると、C・D層の児童は、十分に理解が深まらないままになる。このような正答率の分布が見られる場合、C・D層の児童に焦点を当てた学習を進めていきつつ、A・B層の児童への発展的な展開や課題を準備しておくことが重要である。このことは国語科に限らず、他教科にも言えることである。学級内における学力層の分布を意識した授業づくりについて、各学年の実態を把握し、それに応じた取組を行っていくように説明した。

表5 a校の学力層別正答率 B2(一) (%)

	正答率	サンプル分析平均
全体	32.1	39.1
A層	64.7	63.3
B層	40.0	40.2
C層	10.5	26.2
D層	0.0	16.3

【b校】

b校でも、先ほどと同じB問題の2(一)に着目した(表6)。b校は、各層における大きな優劣はみられないものの、全体的に正答率が低く、改善が必要である。しかし、B問題3三を見ると、A層の正答率は非常に高く、これに対し、B・C・D層は低い。つまりA層の児童は、文章を読み取った上で必要な情報を取り出して文章を書くことはできているものの、図表を読み取った上で文章を書くことに課題があると考えられる。一方B・C・D層の児童にとっては、図表やグラフに加え、文章を読み取ることに課題があるということが、誤答分析シートからも分かる。このような分析の仕方について提示した。

このことに関して、教科書では学習が系統的に

表6 b校の学力層別正答率 B2(一)・B3三 (%)

	B2(一)	B3三	サンプル分析平均
全体	26.8	28.2	22.8
A層	31.6	63.2	44.6
B層	21.4	35.7	19.6
C層	27.3	13.6	12.4
D層	25.0	0.0	4.1

行えるよう配列されていることを生かし、効果的な指導を行うことを提案した。中・高学年では、図表やグラフを基にどのように文章が書かれているかを読み取るような学習を振り返らせることで、全体指導を図ることが有効ではないかと考えた。これは、高学年だけの指導ではなく、低学年から挿絵や写真を見ながら文章を読んでいくといった積み上げが重要である。それぞれの学年や教材で何を指導するか、次につながる教材はどれか、つまりいたときにはどこに戻って指導すればいいか、系統を意識していくことを示し、各学年で教科書を基に系統立てた指導を意識するよう説明した。

次に、B問題の1三(表7)を取り上げる。

b校全体の正答率は11.3%である。学力層別に見ると、A・B層の正答率は21.2%あるが、C・D層は2.9%であり、学力差が顕著に表れている。無解答率の差も大きい。A・B層の誤答のほとんどは、3つの正答条件のうち2つを満たしていた。しかし、C・D層の誤答の多くは、正答条件を満たしているものが1つ以下であった。中でも「◇店長」の発言を受けて書くことについて、A・B層が38.2%と高くなく、C・D層については7.9%と非常に低い結果である。また、C・D層の多くは質問や意見のみを書き、店長の言葉を受けようとする意思がみられなかった。また、店長の言葉を受けようとしている解答を見ると、「分かりました。」「そうですか。」等で返答しているもの、「では、」等で話を転換させているものがみられた。「話を受ける」ということを、直前の店長の話ではなく、インタビューメモや山下さん本人の発言、既に話が終わっている前半部分の店長の言葉を引用しているものも多くみられた。正答率の数字だけでなく、こうした児童の誤答の傾向から探るのも分析の一例であることを示した。

このように見ていくと、各層とも、「話を受ける」ということに課題があった。これは、日常の会話や学習活動における話し合い等を通して体得していく「聞くこと」の領域である。「聞くこと」は、「話すこと」と表裏一体で考えられることが多く、「話すこと」が能動的、「聞くこと」が

表7 b校の正答率と誤答の状況 B1三 (%)

	A・B層	C・D層
正答率 (学校全体 11.3)	21.2	2.9
メモの活用ができています	82.2	68.5
店長の発言を受けて書いている	38.2	7.9
無解答率	5.9	23.6

受動的であると捉えられている傾向にある。しかし、相手を理解しようと思えば、それは能動的な「聞くこと」になる。主体的な態度を育てるためには、話し合い等において、相手の話を受け、どのような言葉で返すことがよいかについて考えることのできる場面を意図的に組み入れていくことが肝要であることを伝えた。相手の話す内容を確認したり、言いかえたり、関係付けたりして質問できる力を付けなければならないことも加えた。ここでは、上記のことを、文章の読み取りで理解し、書くことで表現することとなっているため、三領域における学習活動の中で、理解する力や表現する力を総括的に育成することが重要であると伝えた。

一方、C・D層については、先述の事項に加え、話し手の意図を文章から捉えること自体に課題があると考えられるため、提示されてある文章から、正確に内容を捉えることができなければ、与えられた状況を把握できず、答えることができない。読み取るための基礎基本の指導を、十分に行う必要があることを説明した。

このように、各校の課題を捉えた上で、授業改善の方策等、2学期に向けた取組を検討することができた。これは、国政研からの調査結果資料の公表を待たずに、サンプル分析や四分位数による分析、誤答分析を基にして研修を実施できたからである。また、ここで取り上げた課題は、どの学校においてもあり得ることであるため、協力校のサンプルを基に研修を行えたことは効果があると考えられる。

4 調査結果資料とサンプル分析との比較

この項では、9月に公表された国政研の調査結果資料とサンプル分析とを比較し、差が大きく表れた問題について考察する。

【A問題8-1, 2】

ローマ字で「りんご」と書き取ることについては、サンプル分析と比べ、調査結果資料では13.3ポイント高い結果であった。これについては、ローマ字表記の際、当センターとして小文字、大文字の差異を厳密に求めたことが要因だと考えられる。

【B問題1三】

サンプル分析と比べ、調査結果では27.5ポイント高い結果であった。これは、「店長の発言を受ける」ことの捉え方からくるものであると考える。当センターとしては、先述の通り、「発言を受ける」とは、問題文中の質問をモデルに「◇店

長」の言葉を引用していることとしていた。一方、国政研では、次のように捉えている。

「話し手の意図を捉えながら聞き、話し手の発言を受けて質問する」とは

- ・相手の話の内容を確認した上で質問する
- ・相手の話の内容を言い換えて質問する
- ・相手の話の内容について、分からないところを質問する
- ・相手の話の内容と関係付けて質問する
など（※2）

当センターが誤答として捉えていた「分かりました。」「そうですか。」等が、全国学調では相手の話の内容を確認する正答の解答とされたため、差が開いたと思われる。

【B問題2二（1）（2）】

（1）は、サンプル分析と比べ、調査結果では37.0ポイント高い結果であった。（問題内容については先述のため割愛する。）（2）は問題にある表2の結果を基に、「2 課題」における、「テレビやゲームの時間、メールなどをやる時間」について考える必要があるという本文の内容にも着目しながら、課題に対する解決方法を考えて書く問題である。これは、サンプル分析と比べ29.7ポイント高い結果であった。この問題に対して、当センターは基準を下記のように設定し、全ての条件を満たしているものを正答とした。

二（1）

- ①与えられた資料から、調査結果を捉えており、そこから比較検討し、課題が何かを捉え書いていること。
- ②設定された字数で書いていること。
- ③「次の日に学校のない日」は一般的に金曜日、土曜日のことを指す。
従って、「学校が休みの日」や「日曜日」と解答しているものは誤答とする。

二（2）

- ①与えられた資料を基に、自分の考えを書いていること。
- ②「テレビやゲーム」と「メールなど」の両方の言葉を正しく使って書いていること。

しかし、公表結果を見てみると、（1）は、③については問わなかったため差異が生じたと思われる。また（2）について、②の条件として「テレビゲーム」、「ゲームやテレビ」、「メール」等の言葉を使用していれば正答としているため差異が生じたと考えられる。

【B問題3 三】

サンプル分析と比べ、調査結果資料では33.0

ポイント高い結果であった。この問題では、パン職人の仕事について【特に心に残ったこと】を中心に紹介するため、もう一度【資料2】を読み直しながら、メモにまとめている場面が設定されている。【特に心に残ったこと】を、パン職人としての苦勞と、喜びの2つに分けてメモに記入するのであるが、ここでは、いくつかの条件下で喜びについて書くことになっている。よって、苦勞に対する文を記入しているものについて、当センターでは、正答と見なしていなかった。しかし、調査結果資料を見ると、この点は問われておらず、この差が生まれたと思われる。

問題の採点基準及び採点方法については、この公表結果を基に研究を深めていかねばならない。これらの差異について、十分吟味していく必要がある。今後の全国学調の分析、和歌山県学習到達度調査の作問及び分析等に生かしていきたいと考える。

しかし、今回の正答基準については、当センターとしての捉えも大切にしていきたい。なぜなら、和歌山県における小学校国語科の授業改善を考えていくとき、観点の1つとして挙げられるのが、評価の「曖昧さ」であるからである。指導事項や本時での付けたい力が何であるか明確でない授業、児童の発言や文章表現がなんとなく合っていれば正答と捉えるといった授業が多くみられる中、指導者には、根拠に基づき明確なねらいや基準をもって授業を展開してもらいたい。それが、誰が見ても納得できる考えや解答が出せる児童を育成することにつながると考えている。だからこそ、当センターとしては、正しい情報を捉えたり、正しく言葉を引用したりする力を付けていく授業づくりを目指し、支援等で現場に訴えかけていくべきだと考えている。

5 結果公表後の取組について

結果公表後は、結果の分析に加え、児童質問紙も活用したいと考えた。以下、児童質問紙と学力層の分析方法及び研修計画について述べる。

（1）児童質問紙と学力層の相関関係

一つ目の分析例として、児童質問紙の回答内容と、小学校国語A・B問題について県全体の児童を四分位数で分析した各層の学力との相関について示す（表8）。

四分位数でA層の児童は、質問紙では「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の肯定的な回答が多く、下位層にいくほど肯定的な回答の割合が低くなる傾向が全体的にみられる。その中でも、肯定的な回答をしている割合がA層とD

表8 児童質問紙調査におけるA層とD層の比較 (%)

層\設問番号	(47)	(48)	(49)	(50)	(51)	(52)	(66)	(67)	(68)	(69)
A層	6.8	6.8	4.4	4.4	7.8	7.6	6.3	6.9	9.5	6.9
D層	▲18.4	▲15.6	▲14.3	▲13.9	▲15.1	▲19.6	▲18.7	▲20.2	▲17.5	▲17.4

質問内容

10	あなたが5年生までに受けた授業について、当てはまるものを1つずつ選んでください。
(47)	授業では、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちが立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思う
(48)	授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う
(49)	授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思う
(50)	授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思う
(51)	授業で、学級の友達との間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思う
(52)	授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う
12	あなたは、国語についてどのように思っていますか。当てはまるものを1つずつ選んでください。
(66)	国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている
(67)	国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している
(68)	国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている
(69)	国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめりに内容を理解しながら読んでいる

層では差の大きい特徴的な質問を取り上げる。

表8は、県内各層の児童が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的な回答をした割合の全国平均との差を表している。

児童質問紙10「あなたが5年生までに受けた授業について、当てはまるものを1つずつ選んでください。」(47)～(52)は、A層とD層で肯定的な回答をしている割合を比べると、いずれも15ポイント以上の差がみられる。

児童質問紙12「あなたは、国語についてどのように思っていますか。当てはまるものを1つずつ選んでください。」(66)～(69)は、A層とD層では、いずれも20ポイント以上の差がみられる。

これらの質問のうち、(47)(48)(49)(51)(52)(66)(67)(68)については、全国学調の報告書でも、質問紙と学力のクロス分析において、肯定的回答をしている児童の方が、教科の平均正答率が高い傾向がみられると書かれている質問である。

これらのことから、児童質問紙10、12の内容に関わる授業改善を行うことが、C・D層の学力向上(特に国語)につながり、ひいては県全体の学力の底上げにつながると考える。

そこで、児童質問紙10、12について詳細に検討する。

児童質問紙10については、5年生までに受けた授業について聞いている。特に(47)～(52)は考えること、話し合うこと、発表することに関わる内容である。話し合う活動で、相手の考えを聞き自分の考えを伝えたり、自分の考えを伝えるときに

は、うまく伝わるように工夫したりしていたか等を聞いている。5年生までにということから、今までの積み上げに関わった質問である。

児童質問紙12については、国語についてどう思っているかを聞いている。特に(66)～(69)は自分の考えを話すことや書くこと、文章を読むことに関わる内容である。意見を発表するときにはうまく伝わるように話の組み立てを工夫しているか、自分の考えを書くときには理由が分かるように書いているか、文章を読むときには段落や話のまとめりに内容を理解しながら読んでいるか等を聞いている。

C・D層はこれらの質問に対して、肯定的な回答をしている割合が特に低い。

次に、正答率においても、A層とD層に大きな差がみられる問題を見る。B問題2二(2)とB問題3三は県平均が全国平均とほぼ同じだが、A層とD層を比べると60ポイント以上の差がみられる。この2題は、目的に応じて文章の内容を捉え、自分の考えを明確にしながら読んだり、自分の考えを書いたりすることが問われている。これらはC・D層の学力向上のポイントになる問題であると考えられる。

児童質問紙の分析と実際の結果を考え合わせ、C・D層の学力の向上に視点を絞ると、

- ①文章を読むとき、段落や話のまとめりに内容を理解しながら読むこと。
- ②考えを伝えるときは自分の考えがうまく伝わるように資料や文章、話の組み立てを工夫

すること。

③自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように書くこと。

(以下、課題①②③と略記)

の3点に取り組むことが、特に国語科の学力向上につながると考えられる。

また、C・D層が児童質問紙で肯定的な回答をしている割合が低い原因として、これらの活動の機会が少なかった、または機会はあったが十分にできたという実感が得られなかったことが推察されることから、指導者は自身の授業を振り返り、授業改善に取り組む必要がある。どの教科も課題①から③の活動を意識的に取り入れながら指導し、特に国語科においては、系統性を把握した上で、低学年から繰り返し指導し、積み上げていくことが肝要である。そして、学習したことを確実に積み上げていくためには、学校全体での共通理解が不可欠であると考えられる。

(2) 学力層と児童の学習意識や学習環境との相関

二つ目の分析例として、学校自体が県内の位置にあるのかを加味した分析を示す。各学校における学力層と児童の学習意欲や学習環境との相関について、A層とD層の児童の質問紙調査の結果から検討してみる。

調査対象校のうち、国語A・B問題の県平均正答率をそれぞれ5ポイント以上、上回っている10校をグループ1、5ポイント以上、下回っている10校をグループ2として、肯定的項目に県平均と併せて分析した。グループ1とグループ2を比較した結果について述べる。

国語の学習に対する関心・意欲・態度の項目(61)～(63)、(65)において、肯定回答した数値を見ている(表9)。A層において、「国語の勉強が好きだ」「大切だ」「将来役に立つ」について、肯定回答をしたのは、グループ1と2では、大きな差はみられない。しかし、「よく分かる」については、10ポイント以上の差がみられた。グループ2においては、A層の児童であっても、授業内容の理解については、グループ1と大きな差があることが分かる。D層においては、「国語の勉強は大切だ」と回答した児童は、グループ1よりもグループ2の方が圧倒的に多い。国語の学習に対する関心・意欲・態度面において「国語の勉強が大切だ」と考えていることは重要な項目であるが、それだけでは、学力の向上に結び付いていないことが分かる。

表9 国語の学習に対する関心・意欲・態度の項目の肯定回答(%)

		(61)	(62)	(63)	(65)
A層	グループ1	4.8	9.6	13.7	▲1.9
	グループ2	6.1	12.8	3.1	1.7
	2-1	1.3	3.2	▲10.6	3.6
D層	グループ1	▲9.4	▲23.0	▲10.6	▲9.3
	グループ2	▲3.3	▲10.5	▲13.2	▲3.6
	2-1	6.1	12.5	▲2.6	5.7
質問項目	(61)	国語の勉強は好きだ			
	(62)	国語の勉強は大切だ			
	(63)	国語の授業の内容はよく分かる			
	(65)	国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ			

次に、学習の指導状況の項目(53)～(55)について見る。表10にもあるとおり、グループ1と比べ、グループ2の肯定回答が非常に低い。これらの項目は、県が示す「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」(注4)と合致する項目である。

表10 学習の指導状況の項目の肯定回答(%)

		(53)	(54)	(55)
A層	グループ1	15.1	14.6	7.6
	グループ2	3.7	▲4.8	0.7
	2-1	▲11.4	▲19.4	▲6.9
D層	グループ1	▲11.2	▲2.8	▲13.1
	グループ2	▲19.8	▲14.6	▲20.1
	2-1	▲8.6	▲11.8	▲7.0
質問項目	(53)	授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思う		
	(54)	授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う		
	(55)	授業で扱うノートには、学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思う		

さらに、主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善の取組状況の項目のうち、(47)～(52)について見る(表11)。各項目に違いはあるものの、グループ1とグループ2の状況に大きな差があることが見て取れる。

グループ2においては、県の示す「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」を常に意識しながら、授業を展開していくべきである。その際、何のために児童に目標を示すのか、何の目的で振り返りをさせるのか、学習のまとめとして児童に何を書かせるのかを明確にしていくことが望まれる。

表 11 主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導改善の項目の肯定回答 (%)

		(47)	(48)	(49)	(50)	(51)	(52)
A層	グループ1	10.8	6.8	7.8	4.1	4.6	8.5
	グループ2	0.2	9.6	3.7	▲3.9	▲6.8	▲1.7
	2-1	▲10.6	2.8	▲4.1	▲8.0	▲11.4	▲10.2
D層	グループ1	▲7.8	▲24.6	▲19.5	2.0	▲7.7	▲6.9
	グループ2	▲15.1	▲22.0	▲10.3	▲14.3	▲12.4	▲10.0
	2-1	▲7.3	2.6	9.2	▲16.3	▲4.7	▲3.1
質問項目	(47)	授業では、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思う					
	(48)	授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う					
	(49)	授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思う					
	(50)	授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思う					
	(51)	授業で、学級の友達との間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思う					
	(52)	授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う					

表 12 は、規範意識の項目の肯定回答を示している。A・D層ともに、(39)～(43)の回答について、グループ内で大きな差がみられた。規範意識について、グループ2の児童は低い傾向にあることが分かる。学力向上のための一要因として、規範意識を高めることも必要である。ともすれば、生徒指導や学級集団づくりに意識を向け、授業づくりは後回しにしていることもあり得る。規範意識は、生徒指導、教科指導、道徳指導、特別活動

表 12 規範意識の項目の肯定回答

		(39)	(40)	(41)	(42)	(43)
A層	グループ1	7.1	5.6	0.5	4.9	9.8
	グループ2	▲6.7	▲0.8	▲10.4	▲6.5	▲3.1
	1と2の差	13.8	6.4	10.9	11.4	12.9
D層	グループ1	5.7	▲0.3	8.7	5.5	3.1
	グループ2	▲11.7	▲11.9	▲9.6	▲1.4	▲12.1
	1と2の差	17.4	11.6	18.3	6.9	15.2
質問項目	(39)	学校の決まりを守っている				
	(40)	友達との約束を守っている				
	(41)	人が困っているときは、進んで助けている				
	(42)	いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う				
	(43)	人の役に立つ人間になりたいと思う				

及び人権教育等、学校におけるすべての教育活動で育まれるものであり、学校をあげて、取り組んでいく必要があることは言うまでもない。

ここまで、児童質問紙と学力の相関についての分析方法を例示した。各学校においては、これらの分析方法について、自校の実態に合わせて生かしていくことが求められる。

(3) 具体的な授業改善に向けての研修計画

これまでに述べた分析を生かし、授業改善を目的とした研修計画を立てた。授業改善のためには、どの学校でもすぐに取り組めることが大切だと考え、教科書の活用について具体例を示す。

ア 教科書の構造を知る。

まず、それぞれの単元末にある学習の手引きについて確認する。単元の目標、言語活動の手順、学習の振り返りなどが整理されており、単元構想の参考になる。

また、文学的な文章や説明的な文章について、どの学年で何を学習するのか表にしたものを示し、学年の横のつながり、縦のつながりを可視化する。各学年の教科書を比べることによって、系統性が見えて分かりやすい。

表 13 は、小学校6年間で学習する説明的な文章の教材を整理したものである。第3学年以上では、1学期に2つの「読むこと」の教材で一つの単元を構成している。第1教材は、見開き2ページの短い文章で、全体を一目で見渡すことができ、ここでは単元目標の基礎・基本について学ぶ。第2教材は、第1教材で習得した力を活用して読み、学びを定着させる。2学期は第2学年以上で、「読むこと」の教材と「書くこと」の教材をセットにした単元構成になっている。

「読むこと」の教材では、筆者の説明の仕方について学び、「書くこと」の教材では、習得した力を使って、自分で文章を書く構成になっている。3学期は、1、2学期で学んだことを活用し、発展的に読んでいくよう設定されている(※3)。

こうした教材のつながりや指導事項を学年間はもちろんのこと、全学年の系統性を意識した授業を組んでいくことが望まれる。

一例として、第5学年の2学期教材「天気を予想する」と「グラフや表を用いて書こう」を示す。

読むことの教材「天気を予想する」の主たる指導事項は、筆者が伝えたいこと、論の進め方、図表の活用について考えをまとめること、その考えをまとめて発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることである。ここでは、内容の読み取りを重視することなく、筆者が図表やグラフ、写

表 13 光村図書教科用図書掲載の説明的な文章
教材一覧表

	1学期	2学期	3学期
一年	くちばし	よんでたしかめよう うみのかくれんぼ くらべてよもう じどう車くらべ	ちがいをかんがえてよもう どうぶつ赤ちゃん
二年	じゅんじょに気をつけて読もう たんぼのちえ	読んで考えたことを話そう どうぶつ園のじゅうい せつめいのしかたに気をつけて読もう しかけカードの作り方 ① 分かりやすくせつめいしよう おもちゃの作り方	知っていることとつなげて読もう おにごっこ
三年	まとまりをとらえて読み、かんそうを話そう 言葉で遊ぼう こまを楽しむ	せつめいのくふうについて話し合おう すがたをかえる大豆 ① れいをあげてせつめいしよう 食べ物のみつを教えよう	考えの進め方をとらえて、科学読み物をしようかいしよう ありの行列
四年	きょうみをもったところを発表しよう 大きな力を出す 動いて、考えて、また動く	段落どうしの関係をとらえ、説明のしかたについて考えよう アップとルーズで伝える ① 説明のしかたを工夫して、分かりやすく伝える文章を書こう 「クラブ活動レポート」を作ろう	きょうみをもったところを中心に、しようかいしよう ウナギのなぞを追って
五年	新聞を読もう 筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えを発表しよう 見立てる 生き物は円柱形	説明のしかたの工夫を見つけ、話し合おう 天気を予想する ① 理由づけを明確にして説明しよう グラフや表を用いて書こう	事例と意見の関係をおさえて、自分の考えをまとめよう 想像力のスイッチを入れよう
六年	筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう 笑うから楽しい 時計の時間と心の時間	筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう 「鳥獣戯画」を読む ① 読み取ったことや感じたことを表現しよう この絵、私はこう見る	筆者の考えをとらえ、自分の考えと比べて書こう 自然に学ぶ暮らし 生き物はつながりの中に
	習得・活用セット	読む・書くセット	

真を使う意図を捉え、それが読者に与える効果について考えさせていく。

次の書くことの教材「グラフや表を用いて書こう」では、資料から引用したり図表やグラフを用いたりなど書き方を工夫して、自分の考えが伝わるような文章を書くことができることを目指す。ここでは、図表やグラフの何に注目するか、図表やグラフの中のどの数値や言葉を使って書くのかを考えさせることが重要である。選んだ数値や言葉が、自分の考えを伝えるための根拠となっているかを確かめさせながら授業を進めていく。

このように「読むこと」と「書くこと」を関連させて授業を組み立てていくことを示すことにより、各校における授業改善に役立てる。

イ 教材分析をする。

教材研究をする上で、指導者が教材について理解を深めるために、教科書の手引きに示されているいくつかの視点を基に教材分析を行う。その視点には、題名、設定、登場人物、語り手、出来事、構成などがある。指導者は教材分析をすることにより段落や話のまとまり、構成をしっかりと把握することができる。そうすることで、児童に課題①に関わった指導をするときには、教材分析を生かし、段落や構成を意識させることができるはずである。

ウ 単元構想をする。

単元構想を実際に行う。

○教科書の単元目標を確認する

教科書のリード文及び手引きを参照し、該当単元での付けたい力を明確にする。何を学習させるのか、目標や指導事項を明確にする。

○学習の手引きの内容を押さえる

光村図書教科書の単元末にある学習の手引きには、上段に読みの力を育む設問、下段に言語活動の手順が記載されており、身に付けたい力を常に意識しながら学習活動が行えるようになっている。これを基に、児童の単元終了時のゴールとなる言語活動(手引きの下段)と、その解決に向かうための読みの課題(手引きの上段)及び学習活動を捉える。

○既習事項とのつながりを押さえる

これまでの学習で何を身に付けさせてきたか、また、その上に何を積み上げるのか、今後はどの単元につながっていくのか等、本教材とのつながりや系統性を考える。

○学習の手引きにそって、単元のゴールの時点の児童像を明確にする

児童の具体的な成果物及び付けるべき力が身についた状態のイメージを持つ。このことは、指導者が求めている姿を明確にすることである。このことは、何を根拠にして評価するかを決定することにつながる。ここで、指導すべき事項が見えてくるのである。

○単元のゴールから導入に向け、遡って単元を構想する

単元のゴールの時点の児童像に迫るには、それに至る各時間で何についてどのように指導をしていけばいいのかが、割り振る。

○何をどのように振り返らせるかを確認する

学習を振り返らせ、身に付いた力を確認(メタ認知)することは、学習内容の確実な定着を図るだけでなく、今後の学習の見通しを立てることにつながる。また、学んだことの充実感や

達成感を味わわせることにもなる。振り返りの内容は手引きと連動させるよう設定する。

単元構成で重要なのが、教科書の単元末の学習の手引きに示されている、単元のゴール時点での児童像である。例えば第3学年の教材「ちいちゃんのかげおくり」の学習の手引きでは、感想文を書くことが設定されている。

学習の手引きでは、感想文は、はじめ、中、終わりの構成になっていること、はじめには感じたことを書き、中でいちばん心をうたれた場面と理由、終わりには自分の考えを書くこと、はじめや終わりが中とつながっていなければならないといったポイントが示されている。指導者はこのポイントを把握した上で児童に指導しなければならない。より具体的なゴールのイメージを持つために、実際に児童の立場で感想文を書いてみることも有効である。

また、単元のゴール時点の児童像を明確にしておくことは評価活動にもつながる。指導者が児童に何をどのように書かせればいいのかといったことをしっかり持って指導することは、課題②③の克服にもつながると考える。

校内研修は、基本的に全職員が参加することを想定している。それは学校全体として共通認識し、系統性を把握するためである。研修後は、この研修をモデルに、各校において自校の全国学調の分析を行い、年間を通して継続的に授業改善が図られることを目的としている。

今回の研修のモデルについては、現在数校で各校の実情に合わせて、取り組んでいるところである。

6 取組のまとめ

前述の取組を振り返り、サンプル分析を有効に活用することで、授業改善や学力向上の取組がより一層効果的に進められたと考える。特に学校における検証改善サイクルの確立に向け、校内で次のように進めるよう伝達できたことが成果である(図1)。

次年度、この「検証改善サイクルのモデル」につなげていくため、サンプル分析の結果について、具体的な活用場面や各学校に応じた分析方法の研究等が必要だと考える。また、効果的な情報発信の場とその方法についても、十分検討していく必要がある。

(1) 分析結果について

全国学調後に行ったサンプル分析であるが、これはあくまでもサンプルであり、県内のサンプル

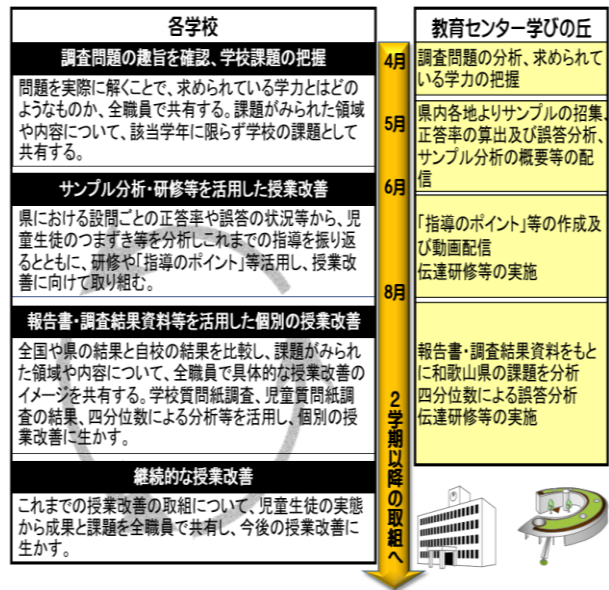


図1 検証改善サイクルのモデル

協力校の正答率のみで分析するため、他との比較ができない。しかし、各教科において、サンプル調査は本調査結果と概ね類似した結果が得られた。また、両者で差があったものもみられたが、当センターとして目指すべき指導を再確認することができた。サンプル分析において、本調査結果の公開を待たずに課題を明確に示すことができたことの意義は大きい。

ここで得られた課題や改善方法等について、先述の研修講座はもちろん、各教科の研修講座等に反映させることができ、日々の授業改善を促す一助となった。また、サンプル分析校での支援内容を、他校への支援や研修等に大いに活用できた。

今回は、正答率の低かった問題に着目して分析を行ってきたが、正答率の高い問題についてその傾向等を学力層に分類し、分析する必要もあると考える。また、分析についても技能を高め、より深くまた広い視野で行えるように努めていく。

(2) 情報の発信について

分析結果を各学校の指導改善に反映させていくように、詳細な分析結果及び指導の具体を示し、各学校で実践できるような方法を提示するとともに、その周知徹底を行うことが必要である。今年度は、当センターにおける専門性の向上を目指す研修や動画による研修パッケージ、管理職を対象とした研修等で伝達したが、学校現場にその内容が十分に浸透したとは言えない。今後は、当センターのみならず、各教育支援事務所、市町村教育委員会との連携をとりながら、幅広く情報発信を行うとともに、その内容についても十分検討

していく。また、発信する際には、現場の状況を把握する方策も考えていかなければならない。

(3)「学校を活性化する校内研修講座 全国学調の活用」の実施に向けて

・小学校の部と中学校の部を分けた開催

小・中の効果的な連結を目指し、系統性等を踏まえた内容を取り入れるが、各教科の課題や指導についての内容の充実を図るため、校種別に実施する。

・特定研修とし、各校1名の出席を要請

研修内容を各校に持ち帰り、動画による研修パッケージと合わせて伝達講習をすることが、1学期中に各校で授業改善を図ることにつながる。そこで、各校より研究主任や教科主任等の担当教諭1名が受講することにより、その効果を共有することができる。

・各校における分析結果の活用方法を説明

研修では、サンプルを基にした県の分析結果を提示することになる。これを各校においてどのように活用していくか、具体的に示す必要がある。正答率だけにとらわれず、四分位数による分析等、多面的に結果を捉えられるようにする。

・演習場面の設定

研修を受け、各学校において何を、どのように実施していくかを、研修の中で検討するような演習の時間を設定する。その際、他校の教師と協議するような場面も取り入れ、効果的な演習となるようにする。

・フォロー体制の確立

研修受講後、各学校において実施した取組とその現状について、アンケートやレポートの提出を依頼する。当センターと学校、各市町村教育委員会と連携を取りあい情報を共有し、学校に対してきめ細やかなフォローができるような体制を築く。場合によっては、学校からの要請を受け、研修を行えるようにする。

<注 釈>

注1 分析ツールには、調査問題を自校で採点した結果をグラフ化する分析ツール①と、文部科学省から送られてきた結果をグラフ化する分析ツール②がある。

注2 これらは、当センターが実施する研修講座である。小学校授業改善研修については、各市町村の教育委員会から推薦を受けた教員が年3回受講する研修。国語科と算数科がある。中学校国語科教育研修及び数学科教育研修講座については、3年間でそれぞれの教科担当の全教員が年間3回受講する研修。

注3 四分位数による分析は、分布についてデータを整理・分析する方法の1つである。榎本・岩井「学力調査結果資料の授業改善への活用についてーデータの表現方法の工夫ー」和歌山県教育センター学びの丘『平成27年度研究紀要』(2015)を参照されたい。

注4 これまでの全国学調の結果から見えてきた課題解決のため、県下の全小・中学校で行う取組をまとめたもの。

- 1 本時の目標・学習課題を明確に板書する。
- 2 児童生徒が自分の考えを書く時間を確保する。
- 3 授業のまとめ・振り返りを書く時間を確保する。

<引用文献>

- ※1 文部科学省・国立教育政策研究所「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」(2016)
- ※2 文部科学省・国立教育政策研究所「小学校国語授業アイデア例」(2016)
- ※3 伊藤義昭「小学校国語の授業改善に向けた年間を通じた学校への支援に関する研究ー校内研修の活性化を目的とした学校外部による訪問を通してー」和歌山県教育センター学びの丘『平成26年度研究紀要』(2014)

<参考文献>

- ・津田修吾「生き生きと学ぶ国語科授業の探究」溪水社(1999)
- ・科学的『読み』の授業研究会「国語科の教科内容をデザインする」学文社(2004)
- ・井尻富美代・杉本直美・堀井英之・中村章子「漢字を活用する力を育てる学習指導の研究ー目的をもって漢字を使う学習活動を通してー」川崎市総合教育センター『研究紀要第21号』(2007)
- ・西岡加名恵『「逆向き設計」で確かな学力を保証する』明治図書(2008)
- ・鶴田清司「知識・技能の『習得』と『活用』を促すために」科学的『読み』の授業研究会編『新学習指導要領をみすえた新しい国語授業の提案』学文社(2009)
- ・久米公「学習指導要領準拠 漢字指導の手引き 第七版」教育出版(2011)
- ・水戸部修治『小学校国語科 単元を貫く言語活動の授業展開』東洋館出版社(2013)
- ・白石範孝・香月正登『論理的に読む国語授業づくり』明治図書(2013)
- ・全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部「アクティブ・ラーニングの国語授業 授業者からの提案」東洋館出版社(2016)
- ・文部科学省・国立教育政策研究所「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語」(2016)
- ・光村図書「小学校国語 編集の趣旨と特色」光村図書ホームページ
http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/henshu/index.html
- ・「学力層に着目した指導方法等に関する分析」文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/08020513/001/004.htm